

第31回

あなたの相棒



人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第31回目は、天美北6丁目の認知症の人向けデイハウス松原「ファミリー」を管理されている、NPO 法人介護支援の会松原ファミリー代表理事の豊永雅雄さんです。

まるで家族のように親身に

普通のおうちみたい。最初に、デイハウス松原「ファミリー」を見たときに思ったのはそれだった。まず、

利用者の皆さんが個別機能訓練をしている所を見せてもらった。名前だけ聞くとなんだかよく分からなかったが、皆で運動したり、歌を歌いな

がリズムに合わせて足を動かしたりしていた。私も少しやってみただれど、思ったよりも筋肉を使って、しんどかった。

その後、代表の雅雄さんにお話を聞かせてもらった。「気づいたかも知れませんが、ここは床の模様が部屋ごとに違います。利用者の人達にわかりやすくするためにね。またト

イレは、緊急時には外側からカギが開けられるようになっています。利用者の人たちが自分で鍵を閉めたこ

とを忘れてしまって、混乱したときのために。それと、ここでは普通の家と同じように、玄関でちゃんと靴の脱ぎ履きしてもらっています」それを聞いた時、「たとえ認知症になっても、住み慣れた地域で、家、人が暮らしていくサポートをする」というこの施設の実行されているなと思った。

次に、そもそも「認知症とはどんなものか」を話してください。私は、認知症になるといういろいろなことを忘れてしまって、自力で何も出来なくなるものだと思っていた。でも実際は自分が覚えていることをすべて忘れてしまうのではなく、つい

さつき起きた出来事を忘れてしまうそう。だから昔のことはきっちり覚えていられるし、出来ることだっというだけある。その一方で、ご飯をさつき食べた、その事を忘れて、「ご飯まだ？」と聞く。飲まないといけ

ない薬、「飲んだの？」と聞くと「飲んで…と思う」と自信がない。「想像してみよ。小腹がすいておやつでも食べようと思って、家族に『なんかおやつない？』って聞いたら『さつき食べてたやん』って言われること。自分は食べた覚えがないのに」

「何かおかしいな、そう最初に気づくのは実は本人なんです。認知症かもしれない、そう思っても、家族に心配をかけたくないからと、気づかれないようにする人が結構います。そして割合それが出来てしまう。でも、そのままにしておくこと知らないうちに症状が悪化してしまいきます。早く治療すれば、進行を遅らせることも出来るし、周りもサポートしやすい。何より大事なものは、認知症を正しく理解し、偏見を無くすことです」

あなたの相棒は？と聞くと、雅雄さんは「メンバー（利用者）やその家族、スタッフ」だと答えてくれた。「ファミリー」はもともと松原市内

の介護者家族が集まり、必要に迫り立ち上げたデイサービスだ。「ファミリー」のボランティア

には利用者の家族の人も参加される。だがここでは、自分の身内はケアしないで他の人へのケアをして

いただく、というルールを作っているそう。家族や身内だと、ぱつとつい言ってしまう一言がある。身内じゃない人になら感情的にならずに、優しくできる。人間は、少し距離を置いた方が、他人に優しくなれたり、勉強に

なったりする、そんな大切なことを教えてもらった。

